住まいの安全・環境チェックリスト：本書の解説

有害な物質を暮らしからすべてなくすことはできません。高価な品に買い替えれば、住まいが完全に安全になるわけでもありません。この章で目指すのは、避けられる接触を見つけ、影響が大きく行動しやすいものから減らすことです。

判断するときは、物質の名前だけでなく、5つの点を確かめます。何が発生源なのか、吸う・飲む・食べる・皮膚に触れるなど、どの経路で体に入るのか、接触する量はどの程度か、どのくらいの頻度と期間が続くのか、そして誰が接触するのかです。子どもは体の大きさや行動が大人と異なるため、化学物質の影響を受けやすいことがあります。妊娠期もまた、化学物質の影響を受けやすい時期になりえます。[4.1] [4.2] この章は妊娠期から思春期までを扱いますが、年齢ごとの危険をすべて網羅した一覧ではありません。

ただし、ある物質が検出されたという事実だけで、個人への害が証明されるわけではありません。この5つの問いは、調べる順番を整えるためのものであり、個人の危険度を点数にするものではありません。

まず優先したいこと

何から始めるか迷ったら、次の順番が役立ちます。

いま続いている重大な危険を止めます。

煙、燃焼、子どもの手が届く化学製品など、明確な発生源を減らします。

水質報告、空気質警報、製品の回収情報など、地域の公式情報を確かめます。

買い替えより先に、保管方法、使い方、換気、仕事場での管理を見直します。

家主、雇用主、行政、医療の専門家など、対応する責任や情報を持つ相手につなぎます。

費用のかかる全面的な交換より、禁煙の空間をつくること、燃焼機器を安全に使うこと、薬品を正しく保管すること、異常時にすぐ人へ相談することのほうが優先されます。

燃焼と一酸化炭素

燃料を使う暖房器具、調理器具、発電機などは、一酸化炭素を発生させることがあります。一酸化炭素は目に見えず、においでも確認できません。機器の設置と点検、発電機を屋外で使うこと、警報器の選択と設置は、その場所の規則と製品説明に従います。[4.6]

一酸化炭素の警報が鳴った場合や、燃焼源の近くで具合が悪くなり、一酸化炭素を吸い込んだ可能性がある場合は、チェックを続けません。全員が外の新鮮な空気の場所へ移動し、いまいる場所の緊急の窓口に連絡します。担当者が安全だと言うまで建物へ戻りません。症状だけでは原因を特定できず、においがしないことも安全の証明にはなりません。[4.6]

1部屋だけ確かめる

一度に家全体を調べる必要はありません。まず1部屋を選び、お子さんが実際に届く高さから見ます。発生源は何か、吸う・飲む・触れる・口へ運ぶ経路があるか、今日安全に変えられることは何か、専門家や管理者へ尋ねることは何かを確認します。

例えば、床近くの開いた洗剤、改修中の粉じん、燃焼機器の周囲、湿った壁を見ます。「確認した」は安全が認証されたという意味ではなく、その時点で観察したという意味です。引っ越し、修理、お子さんの動き方の変化があれば、同じ場所をもう一度見ます。書くことがむずかしい場合は、声で記録する、信頼できる大人と一緒に確認する、覚える項目を一つに絞る方法でもかまいません。

必要に応じて繰り返し使える補助用の記入シートとして、住まいの安全・環境チェックリストがあります。ただし、危険への対応にシートの完成は必要ありません。リンクはhttps://parentingstagebystage.com/ja/shiito/ie-no-anzen-chekku/です。

中断して人へ連絡するとき

一酸化炭素の警報が鳴った場合は、すぐに外へ出て、いまいる場所の緊急の窓口へ連絡します。担当者が安全だと言うまで戻りません。

お子さんが倒れた、けいれんしている、呼吸がむずかしい、または起こしても反応しない場合は、お子さんがいる場所の緊急の窓口へ直ちに連絡します。これらの状態がなくても中毒の可能性がある場合は、症状を待たず、その場所の中毒に関する専門相談窓口へすぐに連絡します。そこへ連絡できない場合は、その場所の緊急の窓口へ連絡します。[4.29]

物質が分からないまま応急処置を独自に始めません。製品や容器が安全に見える場所にあるなら、名称や表示を連絡先へ伝えられるようにしますが、情報を集めるために危険へ近づきません。お子さんを目の前の危険から離し、チェックを終えるために疑わしい材料へ触れたり、動かしたりしません。

記入シート：parentingstagebystage.com/ja/shiito/ie-no-anzen-chekku/

この解説の出典：parentingstagebystage.com/ja/shutten/